〔千葉医学　87：236，2011〕

〔編集後記〕

第87巻５号は，英文原著２報，症例報告２報，第一回千葉医学会賞・奨励賞受賞者から４編，千葉医学会例会報告２編の構成でお届けいたします。

英文原著２報では，菅谷茂らと任乾らがそれぞれ森林浴と水が健康に及ぼす影響に関する研究成果を報告しています。折しも東日本大震災での原発事故による想定外の影響が尾を引く中，日本国民は生活する環境がいかに大事だったかを改めて考えさせられることとなりました。上記２つの原著は，医学的アプローチが少なかった環境と健康の分野に挑んだ論文です。

木下弘壽らの症例報告「ER型救急外来における外科症例の検討」では，救急外来で消化器内科に入院となった症例の0.18%が緊急手術となったと報告しており，詳細な検討を行っています。藤城健らの症例報告「回腸原発の小児悪性リンパ腫による腸重積の一手術例」では，術前・術中所見で悪性リンパ腫による腸重積が疑われた場合は，侵襲を最小限とし早期に化学療法を開始することが重要であると報告しています。

千葉医学会賞：基礎医学部門受賞者の山下政克先生からは「アレルギー発症を制御するTh2細胞の分化と機能維持のエピジェネティクス」および千葉医学会賞：臨床研究部門受賞者の南野徹先生からは「p53依存性老化シグナルと生活習慣病」をご寄稿頂きました。いずれも新しい疾患病態あるいは病因論のパラダイムを構築しつつある研究成果を御紹介頂き会員として嬉しい限りです。更に奨励賞を受賞された澤井摂先生からは「プロテオミクスを用いた神経免疫疾患活動性マーカーの網羅的解析」，川口憲治先生からは「キネシン分子モーターの１分子顕微解析による神経変性メカニズムの解明」をご寄稿頂きました。若手の会員による最先端の精力的な研究を紹介でき本号も充実した内容となりました。

千葉医学会が設立されたのは千葉医学専門学校が千葉医科大学に昇格する前年の大正11年（1922年）でした。千葉大学医学部八十五年史によれば，「我が千葉はたとえ，地方的ではあったにせよ，一の医学少くとも医学教育の中心地であったことは事実である。かくして医科大学の昇格の気運も燃え出してくるにつれ，学校はもちろんその他よりも多数有益な研究業績が発表されるようになり」とあります。元国立千葉病院長の鈴木五郎先生が「大学病院が医育機関として草創以来80有余年の長きにわたり，間断することなくその使命を果たしてきた一筋には，何等の変動もないところに千葉医学の伝統が流れる」と述べておられます。本号も「千葉医学」の伝統が脈々と続き発展し続けていることを裏付ける内容で会員のお手元にお届けできましたのも，会員の皆様のお陰と感謝申し上げます。

（編集委員　白澤　浩）